

●食都・大阪が育んできた都市と胃袋の物語に、
コロナ禍を乗り越えるヒントを探す。

大阪の 胃袋

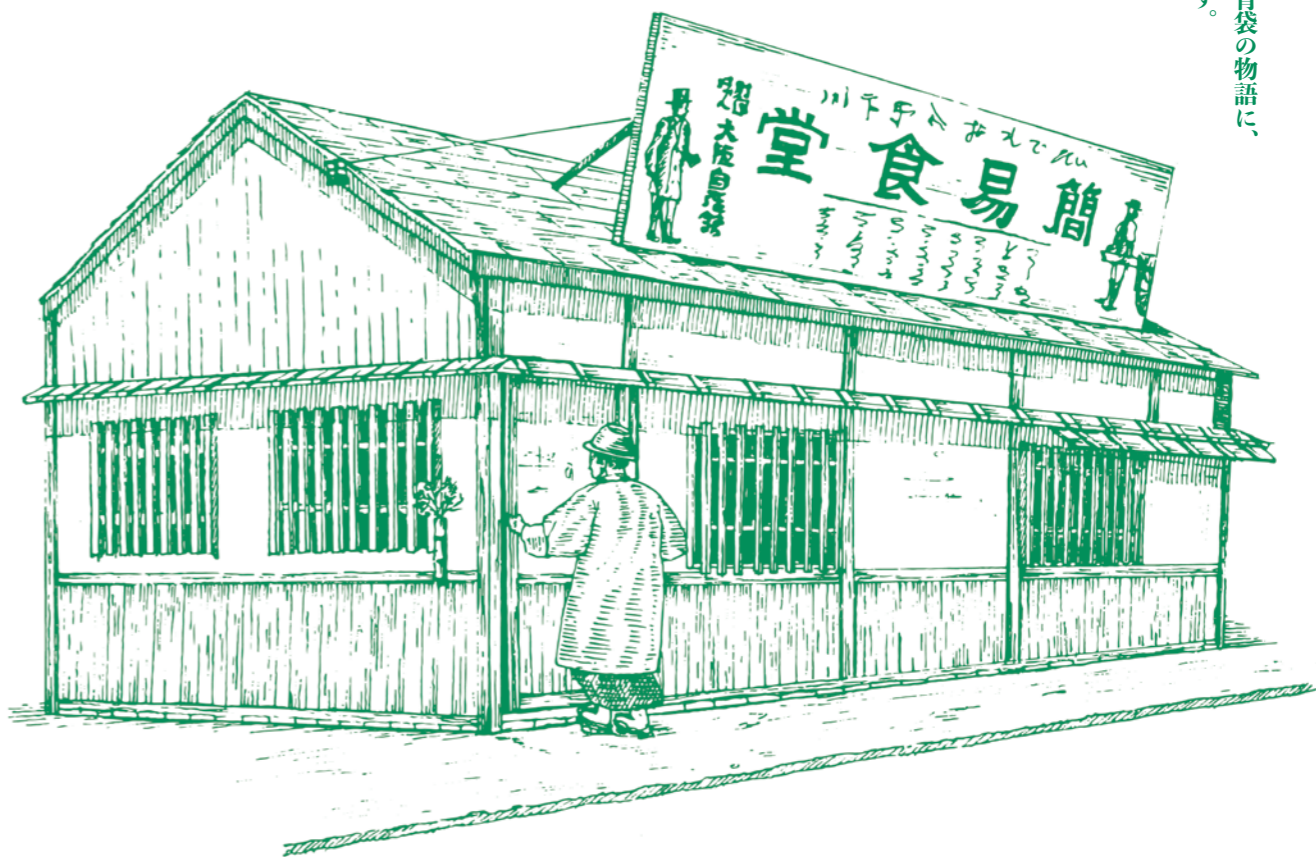
湯澤規子

Yuzawa Noriko

画 三宅瑞人

第6回

食べることで学ぶこと
——民都大阪のフードシステム



大阪の胃袋育ちの三世代

知らぬ間に、胃袋のほかにも引き継いでしまうものがある。先日、アメリカの大学に留学している息子の近況を聞きながら、はたとそれに気がついた。

彼は今、アフガニスタンから難民として入国したティーンエイジャーの勉強を手伝っているらしい。そういえば私は彼と同年の頃、大病院の小児病棟で、長期入院中の子供たちの遊び相手をしていたことがある。そして私の父から聞いたことには、父もまた、やはり大学生の頃に、かつて西成にあった「馬淵生活館」という場所で、子供たちに勉強を教えていたことがあるのだという。

申し合わせたわけではないのに、お互いが知らぬところで同じようなことをしているというのは不思議である一方で、妙に腑に落ちることでもあった。とはいうものの、父の話は一度も聞いたことがなかったもので、三世代の意外な共通点に戸惑いつつも、興味の方が勝ったのは言うまでもない。その話は次のようなものであった。

時は1960年代。天王寺駅から動物園前通りを抜けて通天閣を右手に見ながら進むと、西成の交差点が見えてくる。右の角にはいつも、ドラム缶に入られた木材がごうごうと燃え、その周りには仕事を求めて、あるいは暖をとるために立ち寄った人びとが集まっていた。その角を右手に折れて間もなくの所に馬淵生活館があった。

1962年、同館は大阪市の管轄で、住宅ではなく一時的な宿泊施設として設立され、自立更生を支援する一時的な保護施設という役割を担っていたらしい。父が大学生だったのは1960年代半ばなの

で、同館ができて間もなく足を運ぶようになったのだろう。

2010年に閉鎖された同館については、僅かな研究があるのみで、今となっては詳細を知ることは難しい。ところが、かつてあったその場所に若かりし日の父が確かに存在していたという事実が差し出された時、断片として知っていたいくつかの事象がつながり、輪郭をもって立ち現れてきたのである。

社会の問題は胃の問題

——大阪自彊館の食堂

拙著『胃袋の近代』では、都市や工場の勃興によって集まった数多の胃袋を満たす、様々なシステムの誕生を描いた。その一つに、現在の給食センターの原点ともいえるべき「共同炊事組合」がある。ところが、大阪には共同炊事組合がひとつも存在しなかった。その背景を知ることができる調査結果がある。そこには、次のような事情が記されていた。

「大阪市工業地帯に於て、近時著しく発達し来れる弁当仕出商の問題がある。例えば大阪に於ては代表的なる大工場及び多数の中小工場並に商店に朝、昼、夕の弁当の配給を行ひ、大なる仕出商に於ては工場労働者に対して配給する個数が七千を超えりと云ふ。又市内の仕出商は組合を結成し、中央市場との間に連絡組織を有し、或は又副食物の如きには整然たる分業組織を有して之を加工している」*1

調査結果を記した本が発行された1938年当時の大阪では、共同炊事組合が設立される余地がないほど、仕出商と中央市場が連携した周到なフードシステムが確立されていたということがわかる。加えて、行政が手本にするほど繁盛していた一膳飯屋の

存在も大きかった*2。

他府県では行政や企業の直接関与によって急拵えのフードシステムが整えられる中、大阪が既にそれを確立していた背景に、「天下の台所」としての実績と経験があったのは言うまでもない。淀川を行き交う三十石船に「めしくらわんかい」と叫びながら漕ぎ寄せる通称「くらわんか船」の威勢。狭小一膳飯屋を切り盛りする女主人たちの力量。天満市場に集まる様々な食料と商人らの抜け目なきなど、大阪の胃袋を賑やかしてきた役者は枚挙にいとまがない。その中でも大阪で始まった特筆すべき取り組みがある。それは、一般的な喫食の場に足を運べない人びとの胃袋を満たすセーフティネットの構築である。繁栄という光が強いだけに、その影もまた深かった近代の大阪には、全国から社会事業を先駆ける精鋭たちが集まってきた。その一人、「社会の問題は究竟するところすなわち胃の問題」と論じた法学者の小河滋次郎は、大阪に日本初の方面委員制度（現在の民生委員制度の原型）を整えた。彼に薫陶を受けた大阪府警察部の中村三徳は1912年、西成郡今宮村に私立の宿泊救護および職業紹介部を併設した授産事業施設「大阪自彊館」を創設し、1918年には入り口に「何人でもお入りなさい」と掲げた「第一簡易食堂」を開設した。こうして大阪には、あらゆる胃袋が集える民間食堂が誕生したのである。

100年の時を超えて

「自彊不息（努力して怠らない）」の精神と給食事業は今に引き継がれ、その食堂は100年の時を超えてなお健在である。「衣食住のうち、食の提供は毎日、

毎食ごとの勝負であり、刹那的でありながら安定を求められる、直接処遇の最前線」。これは同館の給食事業に長らく携わってきた職員の印象深い言葉である。都市に希求される場という意味では馬淵生活館もこうした歴史の延長線上にあり、コロナ禍、そして戦禍を生きた私たちがまた、そうした場の重要性に気づかされたばかりである。

ところで、西成界限を歩いていた時に、もう一つ案内された場所がある。それは同地域に佇む小さな図書館「新今宮文庫」だった。西成で働く労働者や大阪自彊館に滞在する人びとで満席の館内に、私の目は釘付けになった。職業柄、これまで様々な図書館に足を運んできたが、熱心に本を読む人がこれほど集う図書館を見たことがなかったからである。

刹那を生きる私たちは、胃袋を満たし、何かを学ぶことを通して、明日も生きていこうと思えるようになるのかもしれない。民都大阪のフードシステムは、食だけでは説明しきれない深みを備えている。そう思い至った時、ふと、西成の町を馬淵生活館に向かつて駆けていく、若い父の背中が見えたような気がした。

注

*1 協働会産業福利部編『工場食の改善と工場栄養食共同炊事場』協働会産業福利部、1938年、29頁。

*2 大阪市産業部編『大阪市の一膳飯屋』『大阪市商工時勢』15、大阪市産業部、1918年、16〜22頁。

ゆざわ・のりこ 法政大学人間環境学部教授。1974年、大阪府八尾市生まれ。3歳で東京、千葉へ転居したが、祖父母や両親の影響を受けた食環境により「大阪の胃袋」育ちを自負。『7袋のポテトチップス——食べるを語る、胃袋の戦後史』(晶文社)や、『ウンコはどこから来て、どこへ行くのか——人糞地理学ことはじめ』(ちくま新書)など、食や排泄といった人間の根源的な生命行動から都市文化を論じた話題作を続々発表。